

女性的人格発達における 「男根位相」「エディプス位相」 の臨床的意義に関する文献的展望

Theoretical Prospects for the Clinical Significance of the Phallic Phase and Oedipal Phase on Female Personality Development

秋山 朋子 AKIYAMA, Tomoko

● 国際基督教大学大学院教育学研究科

The Graduate School Division of Education, Educational Psychology, International Christian University



男根位相, エディプス位相, 去勢コンプレックス, 同一視, 自己愛, 超自我

Phallic phase, Oedipal phase, Castration complex, Identification, Narcissism, Superego

ABSTRACT

This study examines the significance and necessity of differentiation of the phallic phase from the Oedipal phase in order to understand the female developmental process. The study summarizes the characteristics and developmental tasks for each phase. Consequently, the following observations were pointed out. First, the psychological functions acquired in the phallic phase contribute to ego development in the subsequent phases of conflict and become the energy for maturity. In clinical practice, these functions become the energy to work through the CCRT of neurotic patients. Second, the castration complex for women is different from that of men. Its characteristics are much closer to those of the phallic phase such as identification, narcissism, and superego. Third, compared with men, working through the female castration complex relatively contributes to the integration of self-representation.

1. 問題の背景と所在

「女性の発達」や「女性性の発達」、そして中でも精神分析理論の中軸となる「女性のエディプス・コンプレックス」は、Freud, S. が「dark continent」と記述して以来、長く活発な論議が続けられている。古典的精神分析理論のリビドー論的、構造論的見地に対し、文化社会的要因を重視する対人関係論的な視点によって刺激的な反対仮説が投げられ、最近では乳児の観察に基づく発達論的、性別論的な視点が重要視されるようになってきた、というのが大まかな流れであろう。この興味深い領域には、「男根一元論」の是非に始まり、何が「女性性」のオーガーナイザーとなるのか、女兒のペニス羨望の有無や意味について、女兒にとってのエディプス・コンプレックスの意味について、等々、さまざまな争点が残されている。

これらの論点を理論的に展開していく上では、「男根期」「男根自己愛期」「男根エディプス期」等の名前で記述されるこの時期の発達位相そのものについての理解を広げることが不可欠ではないだろうか。この位相の発現時期や区分の是非について、そこでの発達課題やそれによって獲得される精神機能について、この位相を乗り越えていく上での困難さについて等の問題を改めて検討することの必要がある。

そもそも Freud, S. (1924) は、「男根—エディプス」という言葉を用いたように、男根位相とエディバル・ポジションとは同時発生的であるという見方をしている。そして、リビドーの発達プロセスを描いた Abraham, K. や Erikson, E. 等、それに続く著名な分析家たちも今日まで同様の見方をしてきた。

それに対しまず Edgcumbe & Burgner (1975) は、臨臨床的観察から男根位相を二つに区分し、それぞれを男根—エディプス位相とプレ・エディバルな男根位相として、両位相では欲動派生物および対人関係の属性に明らかに違いがあることを指摘した。さらに Blanck, G. ら (1984) は、性器性と対象愛の葛藤であるエディプス葛藤が生じる前に、真の性器性の前身としての性器的関心の時期とし

て、「男根位相」を区分することの意義を主張した。

「エディプス位相」に先行して男根優位の時期を想定する考えは、他の理論家たちにも見られ、例えば、男児のエディプス・コンプレックスを論じた Blos, P. (1985) は、エディプス葛藤の以前に息子に賞賛を与え、二者期から三者期への移行を助ける父親の存在があると主張した。また Freud, S. (1921, 1925) 自身も、同一視について論じる中で、エディプス位相以前に男児が父親へ同一視する時期が存在することを述べている。

三者期としての葛藤が生じる「エディプス位相」以前に、肛門位相以前あるいは「エディプス位相」以後とは明らかに質を異にする父親的機能が存在するとすれば、そこには同様にそれに対応する母親的対象の果たす機能もあるという論も立つ。これらの機能は、葛藤的な「エディプス位相」以降の人格発達を果たし、さらに人格を成熟させていくためのエネルギーとなるものであり、臨床的には、神経症の中核葛藤を徹底操作していくためのエネルギーとなる。女性の人格発達を考える上でも、「エディプス位相」とは区別して「男根位相」を論じることの必要性がここにあると言えるであろう。

2. 目的

本稿ではまず、女性の発達過程を検討する上で「男根位相」を「エディプス位相」と分けて想定することの必要性を再検討するために、両位相それぞれの特徴および発達課題、そしてその概念定位が臨床心理学的に意味するところを、現在までの文献から総合的に振り返り、今後の理論的展開の展望を論じることを目的とする。特に、Kernberg にのっとり、女性が人格を発達させていく上で、この位相をどのように体験し、通過し、それによって、性と攻撃性の二つの欲動をどのように発達させるのかを、自我心理学的観点から検討する。さらに、両位相を区分することの必要性とその意義を明瞭にするために、女性の「去勢コンプレッ

クス」現象に注目して検討する。

3. 精神性的発達理論における男根位相とエディプス位相

3.-1 「男根位相」の特徴および発達課題

「男根位相」とは性別の区別がつき始める時期であり、身体運動能力の増大に伴って探索行動が始まる。それにより、幼児は父親の存在に気づき始める。精神性愛性と対象愛のバランスは、肛門位相において一次的安定を得られるが、この位相においては、再び欲動欲求が優勢になる。幼児はこの時期に、自分と同性の親と異性の親を認識し始めるが、男児にとっても女児にとっても、両親はいまだ、安全と欲求充足の中心的対象として存在し、その中で、欲動欲求は対象関係形成欲求よりも自己愛的欲求に向けて備給される (Blanck, G. 1984)。探索行動とともに未知の世界が広がって、それと同時に不安が生じ始めるが、これは、同一視や取り入れ、抑圧などが盛んに行われるようになることによって防衛される (小谷 1993)。つまり、「男根位相」は、葛藤が生じる以前の時期であることにより、取り入れや同一視の機制を通じ、異性、同性にかかわらず両親双方から多くのものを獲得できる時期であると言うことができる。

先行研究より男根位相と想定される時期において、父親的对象との同一視によって取り入れられる機能は、次のように整理することができる。

まず Freud, S. は、次のように述べている。「幼い男の子が父親に対して特別の関心を表わすことがあるが、それは自分も父親と同じようになりたいし、またそうになりたい、すべての点で父親のかわりになりたい、という関心である。客観的にいうと、彼は父親を理想にするのである。この態度は父親（あるいは男性一般）に対する受身的な、あるいは女性的な態度とは何の関係もなく、むしろすぐれて男性的なものである (Freud, S. 1921 邦訳 p. 222)」。また後にはこの「エディプス前史」における同一視を「父親との感情的な種類の同一

化」(Freud, S. 1925 p. 250)であるとし、さらに続けて、このような父親に対する同一視の質をエディプス期のそれとは明確に区別して「それは、エディプス・コンプレックスの対極にあるものではなく、その準備をすすめるものである」(Freud, S. 1921 邦訳 p. 222)と述べている。

Loewald, H. は、男児が父親との間で持つ陽性の非敵対的關係について、男児が服従か反抗かを迫られるような、去勢の脅威を体現する敵対的な人物なのではなく、子供は、より早期には積極的かつ非受身的な同一視を「陽性イメージ」としての父親に見出し、張り合おうとする特徴があること、そして、この父親イメージは従来エディプス期の父親像として言われているような父親への女性的態度や受身的態度とはまったく関係のない、あるいは相対する男性的なものであり、自我の発達に極めて重要であるということ述べた。すなわち、子供は父親に対して、「父親からの去勢脅威に対処するために生まれる、後期の防衛的な受身的関係」の以前に、「子宮の危険に対して強力に支えてくれる父親への、より早期にみられる陽性かつ極めて男性的な同一化」という、相対する性質が認められるとした (Loewald, H. 1951)。この Loewald, H. の主張は、後に Mahler, M. による直接観察によって確認されている (Mahler, M. 1955)。

さらに最近のものとしては、男児のエディプス・コンプレックスに関する理論を展開した Blos, P. によって、この時期に「強い父親に保護され大事に愛される」ということの重要性が論じられ、その体験が生涯の安全感として内在化されるとされている (Blos, P. 1983)。彼によると、幼い男児は、積極的にせがみ続けることによって父親の是認や肯定を求め、かくて、深い持続するリビドー的絆を確立する。そして、沈着さと自己主張をしみこませるという (Blos, P. 1983)。

また、Erikson, E. (1982) は、「幼児期初期」から「遊戯期」にかけて重要となる発達課題の一つとして「intrusive initiative」を挙げている。これは「攻撃的なおしゃべりで他人の耳や心の中に押し入ること」「活発な移動で空間を侵すこと」「燃えるような好奇心で未知の世界に踏み込むこと」

などを包含するものであるが、Freud, S. に代表されるような「良い父親のイメージ」から取り入れられるものと考えられることができるであろう。

以上のことから、父親的な対象との間で「男根位相」において獲得されるものとして、「正面攻撃」、「競争の楽しみ」、「目標達成への執念」、「征服の喜び」(Erikson, E. 1982)などが想定され、これらには共通して「覇気や冒険好き、進取の気性、勇氣、野心 (Blanck, G. 1984)」が重要な要素となっているものと考えられる。すなわち、「男根位相」においては上述したような「理想イメージ」としての父親が求められ、それが得られることで、「男根位相」の攻撃性は「覇気」として昇華されることになる。この「覇気」を十分に発展させることによって、後に続く葛藤的な関係であるエディプス・コンプレックスに突入し、さらにそれを克服する上での重要な機能、力となると考えられる。

次に、先行研究より、この「男根位相」と想定される時期に限定できるような、母親の対象との同一視によって取り入れられる機能に関しては次のように整理できる。ただし、この時期に関して論じられた文献はほとんど見受けられない。あるいは、記述が見られても肛門位相までの母親機能との区別は混乱している。Freud, S. を始めとして、「男根位相」に関して論じた Loewald, H. らも、母親に関しての展開は少ないと言えるであろう。

Loewald, H. は、前述した父親の「陽性イメージ」に対応する母親との関係として、「一次ナルシズムに由来するより早期の母親との陽性リビドー関係」(Loewald, H. 1951)と記述している。彼の考察を発展させた Mahler, M. は「分離-個体化」の過程を展開したが、この時期における母親は、極めて強くリビドー欲動および攻撃欲動に備給されているとしている。従って、そこでの母親との関係においては、再び母親との共生的な関係に回帰しようとする退行的傾向と、自立を勝ち取っていかうとする傾向との間での葛藤は避けられないものとなる。これは肛門位相に相当する時期から引き続き特徴であると考えられるが、この後者の関係を促進するために Loewald, H. の記述した「一

次的ナルシズムに由来する陽性イメージ」が必要となり、また、この葛藤関係からエディプス布置への移行を果たす上では、母親の子供に対する「絶対的対峙性」が重要となるものと考えられるであろう。

また Erikson, E. (1982) は、前述した「intrusive initiative」に対応する概念として「inclusive initiative」を挙げている。これは、「豊かな感覚的弁別力を持つ可能性」、「未来の母親の知覚の鋭い受容的な特性」と説明されるものである。「男根位相」においては、上述したような対峙性を有する退行的誘引が弱い母親が求められ、それが得られると積極的な「ナルシズム」が得られるのではないかと考えられる。

以上のことから、男根位相の特徴として、父親も母親も相いれないリビドー的縛りの状態ではなく、むしろ両者は、多かれ少なかれ反動的にまた補償的に機能するものと考えられる。それにより、この時期には両性性に対するむしろ非葛藤的な耐性が獲得され、すなわち対象恒常性の最終的な課題が達成され、それが後（エディプス後期以降）の安定した性別同一性の獲得を促進し、青年期まで持ち越されるものと考えられよう。

ここで重要なことは、Erikson, E. の initiative の概念に表われているように、上述したような様々な対象への同一視や取り入れを通じて「男根位相」において獲得される「男根性」というものが、「男根」という字義に表われているような「男性的身体イメージ」に必ずしも一致しないということであろう。つまり、「男性的 initiative」と「女性的 initiative」の両面が、この「男根位相」で獲得されるべき発達課題となる。

3.-2 「エディプス位相」の特徴および発達課題

「エディプス位相」はプレ・エディパル期までの欲動の成熟と自我発達との収斂を表わすクリティカルな時期 (Blanck, G. 1984) と言われ、三者関係の発展が二者関係への固着からの分離を完成させる (小谷 1993) 時期である。この葛藤は、男女

ともに、両親どちらとの関係においても、受身的でなく主体的な位置に立つことによって克服されることが考えられる。

この位相における父親、母親の配置は、Freud, S. によって詳細に論じられている。Freud, S. によって論じられたように、この位相においては男児、女児とも陽性、陰性のエディプス・コンプレックスが発生するとされている。Freud, S. (1923) はこの陽性・陰性エディプス・コンプレックスに関して次のように述べている。「陽性と陰性の二重のコンプレックスがあり、それは子供の根源的な両性的素質に基づいている。すなわち、男の子は父親に対する両価的な態度と母親に対する愛情の対象選択を持つだけでなく、同時に女の子のようにふるまい、父親に対しては愛情ある女性的態度を、母親に対しては女性的な嫉妬ぶかい敵対的態度を示す」。また同じ論文のなかで Freud, S. は「父親との同一視に終わるか、あるいは母親との同一視に終わるエディプス状況の結末は、男女ともに、それぞれの両性的素質の相対的な強度に依存している」と述べており、両性的素質がエディプス・コンプレックスの形成と同時にその解消にも影響を及ぼすものであるとし、Abraham, K. (1923) によって発展されている。

Freud, S. 以降の文献の中では陽性のエディプス・コンプレックスに重点を置いたものが多いが、女児の発達理論においては、比較的男児よりも陽性・陰性のエディプス・コンプレックスが重要視される傾向があるように見受けられる。例えば、Bonaparte, M. (1967) は男児と女児の発達における去勢コンプレックス（男根羨望）の位置付けを、陽性および陰性のエディプス・コンプレックスという概念を用いることで同様のものとして説明した。すなわち、Freud, S. が男児の場合においては去勢不安の発生によってエディプス・コンプレックスの克服が促進されるのに対し、女児はそれの発生によってエディプス・コンプレックスに突入するために、男児と女児の発達、特に超自我発達は異なると論じたのに対し、そこで陽性・陰性というエディプス・コンプレックスの両面の存在に再度注目することによって、Freud, S. の理論を発

展させている。また、女児のエディプス発達に一石を投じた Nagera, H. (1975) は、それまで「前エディプス期」として捉えられていた女児が主に母親に能動的-男性的な愛情を向け父をライバルとする時期を、すでに両親と女児との三角関係が成立しているという点で「エディプス期」に含まれるとしたが、これも、Freud, S. の「陽性・陰性エディプス・コンプレックス」の詳細を女児において明らかにしたものと考えられよう。

以上のことから、「エディプス位相」における父親、母親は、ともに性愛的対象であるとともにその性愛性を抑圧させる存在として複雑に重なり合っているものと考えられる。従って、「エディプス位相」において特徴的な「束縛し、罰を与える」父親の存在は、程度の差はあっても、男児、女児ともに重要な側面として内在化され、リビドーの抑圧を助けたり攻撃衝動を昇華したりするはずである。また女児にとっての父親という意味では、父親からの関心や愛情があることで同性のモデルとしての母親への同一視が促進されることになる。

一方、母親への同一視は「受動的傾向」を促進するものである。受動的傾向は「他人の主観的経験を連想し、その人の立場に立って再経験し、わがことのように感じる」という洞察力や直観力を促進する (Deutsch, H 1945)。

Freud, S. は攻撃衝動をサナトスのエネルギーとして捉えたが、これはそれ自体「サイレント」であり直接現われることはなく、エロスのエネルギーであるリビドーとの融合を欠いた解離の状態において「悪性の破壊的猛威」を発揮する (Freud, S. 1923) と考えた。すなわち、リビドーによって中和された攻撃性は、ナルシズムのリビドーの影響によって自我からはみだし、対象に向かうことによって初めて表現された形をとると仮定されている (Freud, S. 1920)。もともとエロスとサナトスは融合した形で両親に向けられ、同一視や愛着を生じているが、「エディプス位相」に至って、母親に対する強いエロスの＝リビドー的カセクシスが去勢不安によって禁止されると、リビドーは非性化（昇華）される。この非性化によってリビド

一は攻撃性を中和する能力を失う。こうして解離した攻撃衝動は、子どもが同一視の機制によって自分の弱い自我の上に取り入れた超自我に与えられる。「超自我の発生とともに、自我の中のかなりの量の攻撃本能が固定化し、内界で自己破壊的に作用する」(Freud, S. 1938)。従って、先述したようにエディプス位相を乗り越える上では、それに先行する男根位相において攻撃性の昇華としての「覇気」を獲得していることが、非常に重要となるものと考えられる。

以上の記述においては、先行研究にのっとり便宜的に「父親」「母親」を用いてきた。改めて言うまでもなく、これらは全て対象関係論的な見方であるが、自我心理学的には、それぞれの象徴的表象から自己表象へと取り入れたり、それらに同一視することによって得られる自我の機能として見ることのできるものである。

4. 女性における「去勢コンプレックス」と男根位相の発達の意義

「男根位相」および「エディプス位相」における発達の特徴が上述のように区分できることにより、特に意義深いのは、女性の発達における「男根位相」の発達の、そして治療的意義を見直せるということである。このことは特に、女性の「去勢コンプレックス」を考えるとより明確である。

男児と女児の「エディプス・コンプレックス」において、両性をもっとも大きく分けるのは、この「去勢コンプレックス」の質である。つまり、Freud, S. が述べたように、男児の場合、エディプス・コンプレックスを克服、あるいは抑圧する際に「去勢不安」を感じるのに対し、女児の場合は、エディプス・コンプレックスに突入する際に出現するのが「去勢不安」であるとするならば、男児の「去勢不安」は「エディプス位相」後期に位置することになり、女児の「去勢不安」は「男根位相」に位置することになる。従って、「去勢コンプレックス」が見られた場合、男性においてはより「エディプス位相」に特徴的な葛藤を帯びる可能性

があるし、女性においてはより「男根位相」の葛藤に特徴づけられるかもしれない。同様の意味で、「去勢コンプレックス」の徹底操作作業の意味も異なる可能性がある。

つまり、「男根位相」および「エディプス位相」を区分することの臨床的意義として、大きく「エディプス・コンプレックス」と言われる現象の質を明細化するということが考えられる。

次に、女性における「男根位相」の発達の治療的意義についてより明細化する上で、「去勢コンプレックス」という視点から、この時期固有の発達課題を検討する。

4. -1 女性の「去勢コンプレックス」概念とその二面性

そもそもこの概念をめぐっては、女性に「去勢コンプレックス」が存在するのか、女性の「去勢コンプレックス」とは実際にどのような現象をさしているのか、つまり、何を「去勢コンプレックス」とみなすのか、「去勢コンプレックス」が存在するとしてもそれは心理学的発達において重大な意味があるのか、あるとすればそれはどんな意味であるのか、等の疑問が生じてくる。

Freud, S. (1931) は、女児は陰性のエディプス・コンプレックスに支配される期間を乗り越えて初めて正常な陽性エディプス・コンプレックス状況に到達するという言い方で述べたが、女児の発達において、肛門期から(陽性)エディプス・コンプレックスの発現に至るまでの過程が男児に比してゆっくりと移行する、という点は、種々の理論を越えて一致するところである。これは換言すれば、女児の発達においては、この時期に何らかの複雑で困難な過程が存在することを示していると言えよう。それが上述した女性の「去勢コンプレックス」であると考えられる。

Freud, S. は女児がエディプス・コンプレックスに入るそもそもの要因として、すなわち母親から父親へのリビドー対象の変換の要因として「去勢コンプレックス」を位置付けているし、Horney, K. (1967) もその発生理由は一時的な異性愛衝動の

高まりである「女性リビドー」に帰せながらも「ペニス羨望」の存在を確かに認識し、それをエディプス願望からの逃避とみなしている。また、Klein, M. (1932) や Jones, E. (1993), Chasseguet-Smirguel (1970) らは、女兒の場合には男児に比べ、母親に対する口愛的、肛門的攻撃的欲求とそれともなう不安や恐れが顕著に見られることを観察しており、その理由として、女兒が攻撃エネルギーをペニスに託すことができないことを挙げている。最近に近いものとしては、Jacobson, E. (1981) や Tyson, P. (1982) は「女兒はその性器の現実的イメージの形容と受容に、女性同一性の形成により多くの時間を必要とする」と考えている。これらはいわゆる臨床知の蓄積であるが、健康な幼児の観察を行った Mahler, M. S. も女兒の再接近期危機反応は男児に比べて顕著であることを観察し、その力動に去勢コンプレックスを見ている。Galenson, E. & Roiphe, H. (1980) の行った観察においても、女兒では観察したほぼ全例に去勢反応が見られたのに対して、正常男児では顕著でないことが報告されているし、古いものでは、物語構成法を用いた実験においても、女兒において明らかに「去勢コンプレックス」がよく見られる反応であることが報告されている (Friedman, S. M. 1952)。

「去勢コンプレックス」という言葉は、1920 年に Abraham, K. によって導入された概念である。その後、女兒の「去勢コンプレックス」概念は、一般的には「自己の女性性器を失うことや傷つけられることに対する恐れ」と「幻想的男根を失うことの恐れ」として用いられている。例えば、Klein, M. (1932) は、「自己の女性的器官や子どもを産む能力が攻撃されると感じることを早期エディプス段階での女兒の去勢不安として説明している。「性器の一定の成熟とともに、緊張発散のチャンネルとして、あるいは快感を感じる部位として性器領域への自己愛備給が進む。そのような性器表象は身体イメージに統合されている。それらが脅かされるという恐れや、それによる反応（性差の知覚ともなう自己愛損傷、自己表象への脅威）をさして去勢コンプレックスとする」という

ことが、一般的に同意された定義と言えそうである。

この Klein, M. の概念に前述した「男根位相」の特徴を加味し、より臨床的に修正して、本稿では「去勢コンプレックス」を「身体イメージに統合された自己表象や自己愛、自己の能力等、すなわちいわゆる『男根性』が攻撃されると感じたり、それを恐れること」とする。なお、ここで言う『男根性』とは、3. -1 の項で述べたように、必ずしも男性的身体イメージに統合された機能を指すものでなく、女性男性それぞれの両性的身体イメージに統合された機能を指すものとする。従って、「去勢コンプレックス」には二面性があるということになる。つまり、「男性的な initiative を持っていない／傷つけられる」という恐れと「女性的な initiative を持っていない／傷つけられる」という恐れである。従来からの古典的精神分析理論は前者に、そして近年のフェミニズム運動は後者にのみ焦点が当てられたものであると見ることができる。

4. -2 同一視の観点から見た女性の「去勢コンプレックス」

以上をふまえ、上述した女兒の肛門位相から「男根位相」、「エディプス位相」に至るまでの発達プロセスの中での「去勢コンプレックス」を同一視の観点から整理すると次のようになるであろう。

女兒における「去勢コンプレックス」は上述の区分における「男根位相」において生じる。この位相の困難は、上述したように、主に攻撃性の処理に関わる困難である。これは、肛門位相において得られた同性の母親に対する強固な一次的同一視に並行して、異性の父親に対する一次的同一視をすることが、男児に比べて困難であることによるものである。攻撃性の緊張発散のチャンネルが性器表象として身体イメージに容易に統合されやすい男児のほうが、この位相に特徴的な攻撃性の「覇気」としての発散をしやすい。しかしながら、男児の場合にはエディプス位相において、エディパルな父親と対峙した時にこの同じチャンネルを

使うことが女兒に比べて困難になるものと考えられる。

以上のことから、臨床の中に現われる「去勢コンプレックス」においては、女性の場合も男性の場合も父親への同一視によって、その攻撃性の昇華が助けられることは同様であるものの、男性の場合には、その同一視はエディプスを超えるための再同一化であるためにより葛藤が大きい、女性の場合には、葛藤のより少ない父親イメージの取り入れが行われるだけで、攻撃性の自己備給の統合が促され、治療に対する動機づけなどの治療的エネルギーとして昇華されるということが生起するであろうと考えられる。新しい対象との陽性イメージを利用して治療者と対峙し、同盟関係を形成、強化していくという点においてもこのエネルギーが昇華されるであろう。女性のクライアントの場合、治療者が「男根的父親」としての転移を積極的に引き受け、活性化していくことを通じて、「男根位相」に特徴的な「攻撃性」の昇華が促進されることが容易に起こり得るものと考えられる。

4.-3 自己愛の観点から見た女性の「去勢コンプレックス」

近年では、自己愛とエディプス・コンプレックスは大きく関係している (Tyson, P. & Tyson, R. 1984) というのが一般的な見解である。上述したように、「男根位相」と「エディプス位相」とをより明瞭に区分して捉えるならば、男女の「去勢コンプレックス」の質的差異に注目することにより、自己愛に関しても質的な差が指摘されるはずである。「男根位相」が性及び攻撃性の自己への備給が統合される位相であると考えれば、正常な自己愛の基底部分は男根位相において獲得されるものと考えられるであろう。言い換えるなら女兒が自分自身の自我理想と同一化を増加させることによって、「去勢コンプレックス」が解消・抑圧されることができる。これは、Hartmann H. らが不十分な理想化、防衛のために過剰となる理想化、あるいは親の理想化の時期尚早の喪失が幼児

の自己価値および達成の感覚を阻害する (Hartmann, H. & Loewenstein, R. H. 1962 p. 61) と述べたことや、Jacobson, E. (1964) が、女兒は、父親の愛情を失うにしても母親の愛情を失うにしても、エディプス的三者関係に突入することは自己愛の障害となると述べていることなどによって裏付けられているであろう。Hartmann, H. らが述べた親の理想化にまつわる失敗は、上述してきた「男根位相」の発達課題であるし、Jacobson, E. は女性の自己愛の障害がエディプスに突入する際のコンプレックスであることを指摘しているのである。このことは、分離個体化理論において、女兒が自分と母親や父親とを別個の存在として認識しつつ、安心のゆく自己価値観を持ち続けることを巡る葛藤 (Tyson, P. & Tyson, R. 1984) を再接近期の葛藤として位置づけていることとも一致していると言えるであろう。

以上のことから、臨床において女性の事例の中に現われる「去勢コンプレックス」は、自己愛や自我理想と密接に関わるといえる。従って、治療の中で自己愛や自我理想を安定させるように働きかけることによって、治療システムの中に三者関係の布置を活性化させることを助けることができる。

4.-4 超自我の観点から見た女性の「去勢コンプレックス」

男性、女性を問わず、「去勢コンプレックス」の特徴を呈するクライアントには、「厳しい超自我」の存在が問題となることが多い。そしてこの「厳しい超自我」は、度々超自我転移あるいは超自我抵抗として治療の初期過程の展開を妨害する壁となり得る。

元来 Freud, S. は女性の去勢不安を否定したことから、女性のエディプス・コンプレックスの解消・抑圧は晩年まで起こり得ず、超自我の発達は不完全であると考えていた。しかしながらその後、女性の超自我と男性の超自我の質の違いが焦点化され、また、Tyson, P. ら (1984) によって超自我の発達が最早期から潜伏期に至るまでのスパンで

緻密な図式として再構成されたことなどに伴い、このフロイトの考えは、今日では否定されている。

超自我が、攻撃性衝動が自己へ向けられる形で内在化されたものであるということを考えるならば、上述したように性・攻撃性衝動の自己備給の統合が課題となる「男根位相」における課題の達成の質が、「厳しい超自我」を形成する大きな要因の一つとなっているものと考えられるであろう。

従って、臨床の中に「去勢コンプレックス」が現われるとき、その徹底操作を進めることは、同時に「厳しい超自我」転移を緩和し、自律的自我に基づく対等な同盟関係の形成を助けることにつながると言うことができる。

以上をまとめると、女性の「去勢コンプレックス」は自己愛および超自我の発達と密接に絡みあうコンプレックスであり、その徹底操作を進めることは、同時にそれらを補助的に助けることになるということができる。自己愛および超自我の発達は、特に治療同盟形成において重要な要件であるため、「去勢コンプレックス」を「エディプス・コンプレックス」とは区別して捉え直すことは、治療の初期過程の展開を容易にするであろう。従って、「男根的父親」および「男根的母親」の転移、すなわち Freud, S. が述べた治療同盟を助ける陽性転移であるが、これらを積極的に引き受け活性化することにより、女性の神経症患者の場合には、治療同盟の下に中核葛藤としてのエディプス・コンプレックスを対象化することを容易にするものと考えられる。

5. 事例による検討

「男根位相」を「エディプス位相」とは区別して捉え直し、女性の「去勢コンプレックス」を改めて注目することの臨床的意義を述べた。特に初期過程において「去勢コンプレックス」に注目することで、どのように治療者との同盟形成が促進されたかを、事例を用いて検討する。

思春期に発症し、高校卒業と同時に悪化した抜

毛を主訴として来談した 19 歳の女性（A 子）の面接の初期過程を示す。

事例

A 子は、抜毛症状発症と前後してバレエを始め、高校卒業まで選手として活躍していた。高校卒業後、症状が悪化したことを契機に来談したケースである。面接ではポツリポツリゆっくりと話し、口数も少なく幼さが目立ったが、ジーっと相手の目を見つめる姿が印象的であった。特徴として、面接開始当初からセラピストや治療構造に対して非常に適応的であり、セッションが進んでからは面接状況に関して「話をするとき、自分についてどうしても○か×かを考えてしまう」「学校に来るような感じを感じる」などと記述された。加えて、自分に関する記述は否定的で、特に #1～2 においては、自分の病理を露出的に語ったり、「症状を持つ自分を汚いと思ってきた」などの表現があったり、自分を卑下して見せる態度が見られたりした。また、彼氏、親友、母親以外の対象は促しても連想が動かず、家族以外の大人の存在はほとんど語られなかった。特に、母親に関しては「自分を心配してくれる」「干渉してうるさい」などが語られたが、父親に関しては「関心が無い」と言ってセラピストの問いには外見などに関してもほとんど答えなかったのが印象的であった。しかしながら、治療に対する動機づけは非常に高く、グランド・ルール等の治療システムには柔軟に適応し、また、時折はっきりと自律的自我が起動する場面では、バレエへの関心や過去に持っていた理想的自己イメージを生き生きと語った。

このようなクライアントに対し、まず、担当した女性セラピストの他に、上級男性セラピストが臨床構造を守るために母親とのコンサルテーション面接を並行して行うとともに、インテーク面接時の仮契約、試行面接後の本契約面接を担当するという治療構造を組んだ。またセラピストは、超自我転移から抜け出すために新しい対象としてクライアントの前に存在すること、クライアントの健康な自己愛に注目することと、それに並行して、葛藤的でない陽性父親・母親転移をモザイク・メ

イトリックス技法（小谷 1994）を使いながら活性化していくことを念頭に治療を進めた。

面接の経過と共に、「過呼吸になってぶっ倒れるまで練習する」自分、「彼氏ができると夢中になって、振られてもしつこく好きでい続ける」自分、「一度怒ると気持ちを切り替えられない」自分、「考え無しに行動してしまううっかりした自分」などがテーマとなり、強い衝動とそのコントロールの難しさが主訴の中心となった。同時に、バレエが自分の衝動発散の場として有効に機能していたのではないか、という可能性が共有され、自分について「何かあるとすぐカーッとする。それが終わるとサーッと冷めて気持ちがなくなる。」と記述した。これらの経過とともに、セラピストを始めとした内的対象がバレエの象徴を使って生き生きと語られるようになった。また、父親に関する記述に変化が見られ、父親のそれまで語られなかった側面が語られたり、複数の男性が登場して情緒を伴って語られるようになった。

この事例の女性は、柔軟性、現実検討能力、言語化能力等、概して高い自我機能を有し、ポスト・エディパルな人格発達を遂げていることは明らかであった。セラピストの提供する治療構造への高い適応力や後に語られた「〇×」「学校」といった言葉から、厳しい超自我の存在が窺われた。また、自分に関する記述に否定的なことが多かったこと、特に症状にからんで自分を「汚い」と表現するなど、自己愛の備給の不安定さが時折見られた。自分の衝動エネルギーの強さと、それを出すことの快感を前意識的には自覚しながらも、バレエの場以外で表面に出すことはせず、衝動を情緒として感じるができず、そこには自己愛の傷つきを感じさせた。また、同一視対象、特に両親像をエディパルに語るのが難しく、ポスト・エディパルな同性異性の両親に対する再同一視過程でのつまづきが大きいことが中核葛藤テーマとして仮定できた。

このような厳しい超自我、自己愛の不安定さ、同一視対象の少なさは、去勢コンプレックスの特徴である。この3つに対し、セラピストは補助自

我としてそれぞれをサポートしながら、葛藤的でエディパルな三者関係を活性化してそれを探究することよりも、それぞれの同一視対象をモザイク的に置くことで、自己愛的な備給を促し、自己表象をよりしっかりと獲得することを狙った。

次第にクライアントは自分の衝動を対象化して言語化することを始め、それと同時に内的対象を使い始めた。これは、クライアントのリビドー・攻撃性の自己表象への備給が助けられたことで、対象表象への備給の統合も促進されたこと、すなわち、真のエディパル・ポジションが活性化されたことが示されていると考えられる。そのような三者関係配置が改めて直面されたことで、クライアントは精神症状としての主訴を対象化して語り出し、自ら自己探究への関心を示し始め、作業同盟が形成されたものと捉えることができるであろう。男根位相に獲得される機能が活性化されることで、この後、クライアントは三者葛藤としての「エディプス・コンプレックス」に直面し、徹底操作することが可能となるのである。

6. 結論：「男根位相」および「エディプス」位相を分けて論じることの臨床的意義

第一に、先行研究より、「エディプス位相」とは区別されるある特有の発達の意義をもつ「男根位相」と想定できる位相があり、これを「エディプス位相」と明瞭に分けて考えることの意義深い可能性が示された。それぞれの位相の発達の意義は次のようなものである。

「男根位相」は、安全と欲求充足の中心の対象として存在する異性の親、同性の親に対して葛藤することなしに同一視をしていくことにより、多くの機能を獲得する特有の位相である。この位相における課題として獲得すべき機能としては、上述の繰り返しになるが、「ナルシズム」、および「正面攻撃」、「競争の楽しみ」、「目標達成への執念」、「征服の喜び」(Erikson, E. 1982) や、「覇気や冒険好き、進取の気性、勇気、野心」(Blanc, G. 1984) などの形によって、リビドーと攻撃性の自己表象

への備給の統合を果たすことである。

「エディプス位相」は、父親、母親が、ともに性愛的対象であるとともにその性愛性を抑圧させる存在として複雑に重なりあう。従って、「エディプス位相」において特徴的な「束縛し、罰を与える」父親の存在は、程度の差はあっても、男児、女児ともに重要な側面として内在化され、リビドーの抑圧を助けたり攻撃衝動を昇華する。また女児にとっては、父親からの関心や愛情があることで同性のモデルとしての母親への同一視が促進される。母親への同一視は「受動的傾向」を促進し、「他人の主観的経験を連想し、その人の立場に立って再経験し、わがことのように感じる」という洞察力や直観力を促進する (Deutsch, H 1945)。

これら 2 つの位相を区別して置くことは、次に述べる第二点目と深く関係することであるが、女性の「エディプス・コンプレックス」の質を捉える上で特に重要である。

第二に、女児の「去勢コンプレックス」と男児のそれとは、人格形成上、その性質や意味するところに相違がある。女児の「去勢コンプレックス」が、いわゆる「男根位相」から「エディプス位相」への移行期、すなわち「エディプス位相」へ突入する上での課題として、後の人格構造に組み込まれていくのに対し、男児の場合には、「エディプス位相」後期に位置する課題として体験される。このことは、男児の場合には、エディプス・コンプレックスと「去勢コンプレックス」とが同質の要素として人格に組み込まれるが、女児の場合には、その両者のコンプレックスがより分化した要素として構造化されるということの意味していると言いうことができるだろう。すなわち、女性の「去勢コンプレックス」はより、「男根位相」に特有の同一視、自己愛、超自我と密接に関係する。

第三に、女児の「去勢コンプレックス」が「男根位相」の発達課題であるとすれば、それを通過

することによって獲得・強化される機能は、リビドーの備給された自己表象と攻撃性の備給された自己表象を統合することである。他方、男児の「去勢コンプレックス」は「エディプス位相」に位置する発達課題であるため、この機能の獲得・強化には女児より比較的スムーズに行われるものの、エディプス位相後期においてリビドー・攻撃性の備給された対象表象を統合することには、女児よりも困難であるという可能性が考えられる。従って、女性の「去勢コンプレックス」に焦点化して徹底操作することは、臨床的には中核葛藤の徹底操作のためのエネルギーを活性化する上で役立つものと考えられる。

Freud, S. の理論を継承し、特にその技法上の根本的問題を体系的にまとめた Fenichel, O. は、神経症患者の治療において第一に必要なのは「エディプス・コンプレックスの独自の起源と形態とを認識すること」にある、と述べている (1941 邦訳 p. 102)。このことは、現代の代表的分析家である Kernberg, O. F. (1980) が、「エディプス・コンプレックス」は克服することが重要であると言うより、その「質」を捉えることが重要であるとしたことにもつながる。両位相の特徴を区分することによって、臨床的にもその質の違いをより明瞭にすることができるだろう。

特に、女性の「男根位相」および「去勢コンプレックス」に注目することにより、精神療法においては、同一視、安定した自己愛、安定した超自我が促進され、特に初期過程の治療展開に寄与することが考えられる。

今後は、これらの両位相の特徴的相違が、幼児の観察によって確かめられるとともに、複数事例研究によって、神経症患者の葛藤の質の違いとして確認されることが必要であろう。

参考文献

- Abraham, K. (1923). Psycho-Analytic Views on Some Characteristics of early infantile thinking. *British Journal of Medical Psychology*, 3, pp. 283-288.
- Bonaparte, M. (1967). *La Sexualité de la Femme*, Press Universitaires de France. 佐々木孝次訳 (1970). 女性と性—その精神分析的考察—. 弘文堂.
- Blanck, G. (1984). The Complete Oedipus Complex. *International Journal of Psycho-Analysis*, 65, pp. 331-339.
- Blos, P. (1985). Son and Father — Before and Beyond the Oedipus Complex. 児玉憲典訳 (1990). 息子と父親—エディプス・コンプレックス論をこえて—青年期臨床の精神分析理論—. 誠信書房.
- Chasseguet-Smirgel, J. (1970). Feminine Guilt and the Oedipus Complex. In Chasseguet-Smirgel, J. (Eds.), *Female Sexuality*. pp. 94-134. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Deutsch, H. (1945). *The Psychology of Women Vol. 2 Motherhood*. New York: Grune and Stratton.
- Edgcombe, R. & Burger, M. (1975). The Phallic-Narcissistic Phase — A Differentiation Between Preoedipal and Oedipal Aspects of Phallic Development. *Psychoanalytic Study of Child*, 30, pp. 161-180.
- Erikson, E. (1982). *The Life Cycle Completed*, W. W. Norton & Company. 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳 (1989) ライフサイクル, その完結. みすず書房.
- Fenichel, O. (1941). *Problems of Psychoanalytic Technique*. Albany: Psychoanalytic Quarterly, Inc. 安岡譽訳 (1988) 精神分析技法の基本問題. 金剛出版.
- Freud, S. (1920). *Beyond the Pleasure Principle*. Standard Edition 18.
- Freud, S. (1921). *Group Psychology and the Analysis of the Ego*. Standard Edition 18. 小此木啓吾訳. 集団心理学と自我の分析. フロイト選集 6 日本教文社 pp. 195-253.
- Freud, S. (1923). *The Ego and the Id*. Standard Edition 19. 小此木啓吾訳. 自我とエス. フロイト選集 6 日本教文社 pp. 263-299.
- Freud, S. (1925). *Some Psychological Consequences of the Anatomical Distinction Between the Sexes*. Standard Edition 19.
- Freud, S. (1931). *Female Sexuality*. Standard Edition 21.
- Freud, S. (1938). *An Outline of Psycho-analysis*. Standard Edition 23. 小此木啓吾訳. 精神分析学既説. フロイト選集 9 日本教文社 pp. 306-408.
- Friedman S. M. (1952). An Empirical Study of the Castration and Oedipus Complexes. *Genetic Psychology Monographs*, 46, pp. 61-130.
- Galenson, E. & Roiphe, H. (1980). The Preoedipal Development of the Boy. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 28, pp. 805-827.
- Hartmann, H. & Loewenstein, R.M. (1962). Notes on Superego. *Psychoanalytic Study of Child*, 17, pp. 42-81.
- Horney, K. (1967). *Feminine Psychology*. New York: Norton.
- Jacobson, E. (1964). *The Self and the Object World*. New York: International University Press. 伊藤訳 (1981). 自己と対象世界. 岩崎学術出版社.
- Jones, E. (1933). The Phallic Phase. *International Journal of Psycho-Analysis*, 14, pp. 1-33.
- Kernberg, O. F. (1980). *Internal World and External Reality*. Jason Aronson.

- Klein, M. (1932). *The Psychoanalysis of Children*. New York: Norton.
- 小谷英文 (1993). ガイダンスとカウンセリング指導から自己実現への共同作業へー. 北樹出版.
- 小谷英文他 (1994). 集団精神療法の手引き. 山口隆ら (編). 集団精神療法的アプローチー治療集団と学習集団の続け方ー. 集団精神療法叢書. pp. 41-52.
- Loewald, H. W. (1951). Ego and Reality. *International Journal of Psycho-Analysis*, 32, pp. 10-18.
- Mahler, M. & Gosliner, B. (1955). On Symbiotic Child Psychosis. *Psychoanalytic Study of the Child*, 10.
- Nagera, H. (1975). *Female Sexuality and the Oedipus Complex*. Jason Aronson.
- Tyson, P. (1982). A Developmental Line of Gender Identity, Gender Role, and Choice of Love Object. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 30, pp. 59-84.
- Tyson, P. & Tyson, R. (1984). Narcissism and Superego Development. *Journal of American Psychoanalytic Association*, 32, pp. 75-98.